

人麿挽歌の特質

塩 谷 滋

萬葉集の分類の中で雜歌・相聞と並んで重要な部門を形成してゐるものに挽歌がある。挽歌は晉書樂志に「挽歌出_二于漢武帝役人之勞_一、歌聲哀切、遂以爲送_レ終之禮」とあり、また文選註に「田横爲_二高祖_一自殺、門人傷_レ之、作_二薤露蒿里_一二章_一、使_二挽_レ柩者歌_レ之」とある如く、元來は中國から來た言葉であることは明らかである。而して崔豹の古今注によれば「薤露蒿里並喪歌也。出_二田横門人_一。横自殺、門人傷_レ之爲_二之悲歌_一。言人命如_二薤上之露_一易_二晞滅_一也。亦謂、人死魂魄歸_二蒿里_一、故有_二二章_一。(中略)至_二孝武時_一、李延年乃分爲_二二曲_一。薤露送_二王公貴人_一、蒿里送_二士大夫庶人_一、使_二挽_レ柩者歌_レ之。世呼爲_二挽歌_一。」とある如く、墨縣の島に隠れてゐた齊王田横が、漢の高祖の招きに應じて戸卿の驛まで行きながら、そこで自殺したのを知つてその門人たちが悲しみ痛み、薤露蒿里なる二章の歌を作り、それを歌ひつつ柩を挽いたのが挽歌の起源であるとされてゐる。かやうに中國に於ける挽歌は、元來葬送の際に柩を挽きながら歌つたものであるが、その後次第に葬儀に用ゐる歌曲を意味するやうになり、更に變じて死を悼む意を述べた詩を意味するものとなつたのである。我が國に於ても倭建命の後及び御子等が、命の御葬送の際にその薨去を悲しんで作られた

是に倭に坐す后等、及御子等諸、下り到まして、御陵を作りて、即ち其地の那豆岐田に匍匐ひ廻りて、哭かしつつ歌ひたまはく、
なづきの、たのいながらに。いながらに、はひもとほろふ、ところづら。

是に入尋白智鳥に化りて、天に翔りて、濱に向きて飛び行しぬ。爾れ其の後及御子等、其の小竹の荊杞に足踏み破るれども、其の痛きをも忘れて、哭く追ひいでましき。此の時の歌、

あさじぬはら、こしなつむ。そらはゆかず、あしよゆくな。

又、其の海鹽に入りて、なづみ行きましし時の歌、

うみがゆけば、こしなつむ。おほかはらの、うゑぐさ。うみがは、いさよふ。

又、飛びて、其の磯に居たまへる時の歌、

はまつちどり。はまよはゆかず、いそづたふ。

是の四歌は、皆其の御葬に歌ひたりき。故れ今に其の歌は天皇の大御葬に歌ふなり。(古事記中卷)

といふ四首の御歌は、「是の四歌は、皆其の御葬に歌ひたりき。」とある如く、命の御葬送に際して后や御子等によつて歌はれたことは明らかであり、中國に於ける挽歌の第二義に相當するものである。しかもその最後に「故れ今に其の歌は天皇の御葬に歌ふなり。」と附記されてゐるのを見ても、これらの御歌が挽歌として傳承されたことは明白であり、我が國に於ける最初の挽歌的な作品と云つてもよいであらう。

かやうに我が國に於ては挽歌は葬送の禮に用ゐる歌曲を意味するものであつたが、その後次第にその意義が變化し、萬葉集に於ては既に中國のいはゆる挽詩の意に近いものとなり、單に死を哀悼する意を述べた歌の意味に用ゐられてゐる。古義に「さてこれは後々の歌集に、哀傷歌部あるに、全同^ヲじければ……」と述べてゐる如く、萬葉集に收められてゐる二百六十餘首の挽歌は、古今集以後の哀傷歌に似た意味のものとなつた。しかし直接死喪に關係した歌のみを集めたものであり、また單に個人的な哀悼の情を歌つた歌以外に、公的な性質を帯びてゐる歌をも含んでゐるの

は、古今集以後の哀傷歌には見られぬところである。

(註) 萬葉集古義總論其一 十一頁

二

萬葉集に於ては挽歌は齊明天皇の御代以來、倭太后・大來皇女をはじめ多くの人々の作品が見られるが、中でも挽歌によつて特に有名なのは柿本人麻呂である。人麻呂は萬葉第二期藤原宮時代の歌人であり、懷古・別離の歌や皇室の讃歌等にも往くところ佳ならざるなき才能を縦横に發揮したが、何と云つても人麻呂の和歌的世界の中心は挽歌であつた。人麻呂はその天分を挽歌に於て餘すところなく示した悲傷詩人であつた。高市皇子尊をはじめ幾多の皇子・皇女の死を悼み、愛する妻の死を慟哭するのみならず、見も知らぬ行きずりの死人に對しても深い悲しみと同情の涙をそそいでゐる。總じて人麻呂の作品には死の歌の比率が他の歌人に比べて多量である。しかもその中には「讃岐の狹岑の嶋に石の中に死れる人を視て」作つた歌(二一二〇)等、見知らぬ路傍の人の死を歌によつて弔ふといふ作品が實に多い。かかる作品を残したのは、僅かに足柄の坂の死人を悼む田邊福麻呂の一例(九一八〇〇)を除いては、他の著名歌人には見られぬところである。人間の死と運命に對する悲傷は人麻呂の詩情を動かした最大のものであり、極言すれば、挽歌は人麻呂に始まり人麻呂に終つたとも云へるであらう。

人麻呂の挽歌には、死者が死とともに消滅しないで、死後も現世に於けると同様の生活を續けるといふ觀念が濃く横溢してゐるのが感ぜられる。人麻呂によれば死はこの世を過ぎ去ることであつた。輕皇子に供奉して安騎野に宿つた際、亡き日並皇子を偲んで詠んだ「眞草刈る荒野にはあれど黄葉の過ぎにし君が形見とぞ來し」(二一四七)の歌や、最愛の妻の死を慟哭した「渡る日の暮れ去るが如 照る月の雲隠る如 奥つ藻の靡きし妹は 黄葉の過ぎて

去にきと」(二二〇七)の長歌、或は吉備津安女の死を悲しんだ「時ならず 過ぎにし子らが 朝露の如 夕霧の如」(二二一七)の長歌や、紀伊の國で詠んだ「黄葉の過ぎにし子等と携り遊びし穢を見れば悲しも」(九一七九六)「潮氣立つ荒磯にはあれど行く水の過ぎにし妹が形見とぞ來し」(九一七九七)の歌等に見られる如く、人はこの世の生を終へると現世を去つて死の國へ行くといふ人麻呂は考へたのである。而して死者の行くべきところとせられたのは、「樂浪の志賀津の子等が罷道の川瀬の道を見ればさぶしも」(二二一八)と吉備津安女の挽歌にある如く黄泉國であつた。しかしながら死が絶對的な消滅を意味しないといふ考へは、古代に於てはすべての人々が抱いてゐたことであつた。伊弉那美神の神話をはじめとして記紀に見られる多くの物語には、死者がそのままの身體と心をもつて黄泉國へ移り、その國で現身の時と同様の生活を送るといふ觀念が、古代人にあつたことを示してゐる。人麻呂も例外ではなく、これら古代人と共通の思想をもつてゐたのである。

見も知らぬ行きずりの死人に對してその死を哀悼した歌の場合にも同じことが云へる。讃岐の國狹岑の嶋の石の中に見た死者を悼んで、「名ぐはし 狹岑の嶋の 荒磯面に 廬して見れば 浪の音の 繁き濱邊を 敷妙の 枕にして 荒床に より臥す君が 家知らば 行きても告げむ」(二二二〇)と述べ、また香具山で屍を見ては「草枕旅の宿に誰が夫か國忘れたる家待たまくに」(三一四二六)と歌つてゐるが、恰も生ある者が臥して寝てゐるかの如く、或は故郷を忘れて何時までも滞在してゐるかの如く表現してゐるのも、やはり死を絶對の消滅と考へない觀念のあらはれであらう。また「隱口の泊瀬の山の山の際にいさよふ雲は妹にかもあらむ」(三一四二八)「山の際ゆ出雲の兒等は霧なれや吉野の山の嶺に棚引く」(三一四二九)の如く、死者を火葬にした場合に詠まれた歌に於ては、泊瀬の山の間にさまよふ雲を見ては、あれは土形娘子ではなからうかと思ひ、また吉野の嶺にたなびく霧を見ては出雲娘子を偲んでゐる。これらの歌で人麻呂は死せる娘子を描いてゐないにも拘らず、その雲や霧は今に既に亡き娘子たちにさも似たるものに變じ、いつまでも山の間をさまよふてゐる娘子の姿が眼前に髣髴と浮び上つて來る。雲や霧を妹であらうと歌ふの

も死者の永世を信ずればこそであらう。

ところが皇族の薨去を追悼する歌の場合には、死者の永世を信ずることは同じであるが、死後行くべき場所が他の歌の場合と違つてゐる。即ち、日並皇子を追悼した挽歌の中で、天武天皇の崩御に關して「高照らす 日の皇子は飛鳥の 淨の宮に 神ながら 太敷きまして 天皇の 敷きます國と 天の原 石門を開き 神上り 上り坐しぬ」(二一六七)と述べ、また高市皇子の殯宮に際して、「ひさかたの天知らしぬる君ゆゑに日月も知らに戀ひわたるかも」(二二〇〇)「哭澤の神社に神酒す禱ひ祈めどわが王は高日知らしぬ」(二二〇二)と歌つてゐるが、人麻呂は、天皇や皇子は崩御或は薨去の後には地上の御墓所に坐さずして昇天し給ひ、この世ならぬ天上の國を御支配御統治遊ばすことになるかと考へたのであつた。現代人には自然物とみられる天空も、人麻呂にとつては一つの國土であり、皇族の御統治を必要とする場所であつた。死後昇天され天上に於て現世と同じ生活を續けられるといふ思想は、これまでは見られなかつたものであり、實に神祕的な莊嚴感にみちてゐると云へよう。

生前自己の最も身近な存在であつた妻の死を慟哭する一連の挽歌にも、やはり死後の不滅を信ずる思想があらはれてゐる。即ち、「秋山の黄葉を茂み惑ひぬる妹を求めむ山道知らずも」(二二〇八)の歌は、死亡した妻が現に今秋山の黄葉うるはしき中にさ迷ふてゐる、自分も行つて逢ひたいが、たゞそこへ行く道を知らない、といふのであるが、これは死人となつた妻を美しく表現したものである。美しく非現實化されて山をさまよふ妻は、死人といふよりも現實の妻を思ひ描かせる。また「憑めりし 兒らにはあれど 世の中を 背きし得ねば かぎろひの 燃ゆる荒野に 白妙の 天領布隠り 鳥じもの 朝立ちいまして 入日なす 隠りにしかば」(二二一〇)の長歌に於ては、「かぎろひの燃ゆる荒野」に立ち出でた妻が、羽貝の山へと蹣跚としてみづから隠れてしまつたと、死にゆく妻の姿を描いてゐるが、まるで生ある人が旅に出たのと同じ様に歌つてゐる。しかもこの長歌の終りの方で、「大鳥の 羽貝の山に 吾が戀ふる 妹は坐すと 人の言へば 石根さくみて なづみ來し」(同上)と歌つてゐる部分に至つては、一層強烈

な現實感が溢れてゐる。人麻呂にとつては山は死の國であつた。實際には山に葬られたのであるが、人麻呂はその山の中に死人達がみづから身を隠し、生前と同じ生活を續けてゐる場所を想像し、かかる世界が山だと歌つてゐる。しかも一般には、人はこの世の生を經盡くしてから死の國に行くと考へられてゐたのに、人麻呂にあつては死んだ妻は今もなほ羽貝の山の黄葉の中にゐるのであり、戀しさの餘り人の言葉を信じて、岩を踏み分け難澁しつゝ、妻に逢ふべくみづから山の中まで出かけて行つてゐる。人麻呂に於ては現世と死の世界との間に時間の経過は存在しないのである。ここに人麻呂の挽歌の一つの特色が認められる。

三

現實の生命をこよなく愛し、自己の住む現世を最高の價值ある世界と考へる現世主義的な世界觀は、人麻呂の作品を貫く精神であつた。人麻呂が活躍した藤原宮の時代は、天智天皇によつて着手された革新の事業が着々とその成果を收め、途上幾多の悲劇を伴ひはしたが、天皇中心の中央集權制度が確立され、搖ぎなき國家的權威の樹立された時代であつた。人麻呂は若き日に混亂の時代を生き、今や治まれる泰平の世に逢ふて、「山川も 依りて奉れる 神の御代かも」(二―三八)と現つ神にまします天皇の御後威を讃へ、新しい國家を謳歌し、かかる御代に生きる喜びを誇らかに歌ひ上げてゐる。未だ佛教の採用による日本古來の思想の混亂もなく、世の不合理を嘆き人の世の無常を諦視する考へも人麻呂には見られない。たゞ神を、神話を信じ、ひたすら現實の生命を愛し、愛するが故にもつ生への感動を最も明らかな相で表現したのである。現世は人麻呂にとつてはかくも満ち足りた無上の世界であつた。それだけに人がこの世を去り行くといふことはこの上もなき悲痛の情を起させたのである。既に述べた如く、人麻呂にあつては死が絶對の消滅を意味するものではなく、死者は死後も現世と變らぬ生活を續けながら死の國に存在すると考へら

れてゐた。しかしながらこの輝かしき現世から去り行くことを意味する死が、いかにその不滅を信じられたとしても、その底に流れる深い悲しみの情は否定し得ない。人麻呂の場合、現實の生命に對する愛著が誰にもまして強烈であつただけに、失はれた生に對する悲しみは一層深く激しいものであつた。

挽歌は殆んどすべてがその人の生前を追悼することを基本とするものであるが、人麻呂の挽歌にはそれが特に大きな部分を占めてゐる。例へば明日香皇女の死を悼んだ歌に於ても、「現身と 念ひし時 春べは 花折りかざし 秋立てば 黄葉かざし 敷妙の 袖たづさはり 鏡なす 見れども飽かに 望月の いやめづらしみ 念ほしし 君と時々 幸して 遊び給ひし」(二一九六)と皇女が御在世の時に夫君と楽しく遊び給ふたことを回想し、それに續けて「然れかも あやに悲しみ ぬえ鳥の 片戀づま 朝鳥の 通はす君が 夏草の 念ひ萎えて 夕星の か行きかく行き 大船の たゆたふ」思ひをし給ふと、亡き皇女に對する夫君の哀切の情を述べてゐる。今は摺むよしもない戀の想ひ出を、過ぎ去りし日に心を廻らすことによつて僅かにそれに觸れ、その想ひ出の中に今日の樂しみも未來の希望も放棄して陶醉するといふ哀情と追悼の交錯が、この挽歌を形成する内部的契機となつてゐる。またこの明日香皇女の挽歌は「泊瀬部皇女忍坂部皇子に獻れる歌」(二一九四)「吉備津安女の死りし時、作れる歌」(二二一七)等とともに、夫婦の一方が取り殘されて、亡くなつた半身を戀ひ慕ふ氣持を代作した挽歌であるが、あたかも自分が戀の對象を失つた場合であるかの如く驚くべき熱心さを以て歌つてゐるのは、人麻呂にしか見られないところである。

かやうに人麻呂の挽歌は現實の歎きのみを主體とするものではなく、過去への追懷が重要な要素を占めてゐるが、中でもその代表作と思はれるのは「日並皇子尊の殯宮の時」の作(二一六七)と「高市皇子尊の城上の殯宮の時」の歌(二一九九)であらう。いづれも彼が畢生の努力を傾注したと思はれる力作であるが、過去への回想がこれらの挽歌に重厚さを與へ、作品としての成功をもたらしたのであつた。これらの挽歌に於ては人麻呂はまづ故人の人間像を描くとともに生前の行爲を讚美し、それを基盤として故人の死を悼む形式をとつてゐる。日並皇子を哀悼する挽歌は

六十五句より成る長篇であるが、その中日並皇子に直接關係した部分は、「わが大王 皇子の命の 天の下 知らしめしせば」から以後二十六句にすぎない。一首の最後にある「そこ故に 皇子の宮人 行方知らずも」は作者の感懷を述べた結びの句である。この二部分に對して溯つて過去を敘述する部分は、「天地の 初の時 ひさかたの 天の河原に 八百萬 千萬神の 神集ひ 集ひ坐して 神分ち 分ちし時に 天照らす 日雲の尊 天をば 知らしめすと 葦原の 瑞穗の國を 天地の 寄り合ひの極 知らしめす 神の命と 天雲の 八重かき別きて 神下し 坐せまつりし 高照らす 日の皇子は 飛鳥の 淨の宮に 神ながら 太敷きまして 天皇の 敷きます國と 天の原石門を開き 神上り 上り坐しぬ」と實に三十六句を占めてゐる。日並皇子の死を悼むのに、人麻呂は遙か神代に溯つて天地開闢の悠遠なる太古のことから歌ひ起すのである。即ち、天の河原に八百萬千萬の神が開かれた協議によつて天照大神が高天原を治め給ふこととなり、葦原の瑞穗國へはその統治者として瓊々杵命を降臨せしめ給ふたといふ神話を敘し、天孫の後裔たる天武天皇及び日並皇子に言ひ及んでゐる。人麻呂には天の河原の會議が、既に天孫降臨も天武天皇の御支配も、また日並皇子を天武天皇と並んで天下を統治されるべき方とも定めてゐたと思はれたのであらう。かくの如く遙かな神話にまで溯ることによつて、この挽歌は莊嚴な感じを深くしてゐる。次いで日並皇子の輝かしい生前を回想して、「わが大王 皇子の命の 天の下 知らしめしせば 春花の 貴からむと 望月の 満しけむと 天の下 四方の人の 大船の 思ひ憑みて 天つ水 仰ぎて待つに」と人民らの深い信頼と敬慕のさまを述べてゐる。しかも御即位を鶴首して待つた人民たちの期待も空しく、悲しみの中に皇子は薨去されたのであつた。この人民たちの皇子を敬仰し奉る心の表現の中に日並皇子の生前の面影は明らかに描き出されてゐる。人麻呂は歴史に結びつくことによつて、現在の事象がいかによ緒ある遠き根源から生れ來つたかを人々に語り知らしめるのである。かくの如き過去のとり入れ方は、人間の生がいかによ貴重なものであるか、いかに意義深き人生であるかを語つてゐるのである。しかも生が貴重であればある程死に對する悲痛の情は深くなるものである。過去を回想して故人の人間像を

描き出すといふ表現方法によつて、人麿呂の挽歌は非常な効果を収めてゐると云へよう。

日並皇子を追悼する挽歌は今日制作年代の判明してゐる作で云へば、人麿呂の數多くの皇族の殯宮を悼み奉る挽歌の中で最も早い作品である。従つてここに内包されたものが後の作品に於て見事な成長を遂げた場合が少くない。特に高市皇子を哀悼する長大な挽歌（二一九九）は、萬葉隨一の長さをもつものであるが、その内容は全くこの作の延長の如き觀があり、皇子の生前を回想することによつて一層強くその死を悼む情が表現されてゐる。全體の半以上に亘つて生前皇子が壬申の亂に於て樹てられた戦功を雄渾なる調子を以て述べてゐる。即ち

かけまくも ゆゆしきかも 言はまくも あやに長き 明日香の 眞神の原に ひさかたの 天つ御門を かしくも 定めた
まひて 神さふと 磐隠ります やすみしし 吾が王の きこしめす 背面の國の 眞木立つ 不破山越えて 高麗劍 和豐が
原の 行宮に 天降り坐して 天の下 治め給ひ 食國を 定めたまふと 雞が鳴く 吾妻の國の 御軍士を 召し給ひて ち
はやぶる 人を和せと 服従はぬ 國を治めと 皇子ながら 任せ給へば 大御身に 太刀取り帶ばし 大御手に 弓取り持た
し 御軍士を 率ひたまひ 齊ふる 鼓の音は 雷の 聲と聞くまで 吹き響むる 小角の音も 敵みたる 虎か吼ゆると 諸
人の おびゆるまでに 擡げたる 幡の靡は 冬ごもり 春さり來れば 野ごとに 著きてある火の 風の共 靡くがごとく
取り持たる 弓弭の騒 み雪降る 冬の林に 飄風かも い卷き渡ると 思ふまで 聞の恐く 引き放つ 箭の繁けく 大雪の
亂れて來れ まつろはず 立ち向ひしも 露霜の 消なば消ぬべく 去く鳥の 競ふ間に 渡會の 齋の宮ゆ 神風に い吹き
惑はし 天雲を 日の目も見せず 常闇に 覆ひ給ひて 定めてし

と歌ひ、現つ神たる天武天皇の御委託によつて、高市皇子の壬申の亂に於ける御奮闘が生れ來つたといふ由來を明らかにすると同時に、「天の下 治め給ひ 食國を 定めたまふ」と述べてこの壬申の亂の目的を示してゐる。人麿呂は高市皇子の薨去といふ事實を述べるだけでは飽き足らず、薨去から甚しく溯つて壬申の亂の敘述をこの長大な挽歌の中の最も生彩ある部分となるまでに述べ來り、しかもそれにも満足せずしてその亂の由來を述べ、高市皇子と壬

申の亂との關係にまで溯つたのである。その後語を續けて「瑞穂の國を 神ながら 太敷き坐して やすみしし 吾
が大王の 天の下 申し給へば 萬代に 然しもあらむと 木綿花の 榮ゆる時に」と、亂後泰平の世に高市皇子の
太政に參與せられたことを述べ、更に薨去のことに言及し、追慕の言葉をもつて結んでゐる。全體の大半を占める皇
子の御功績に對する讃辭は、生前の皇子に寄せる人麻呂の敬慕の情の強さを物語るものであり、亡き皇子の面影を偲
ぶ人麻呂の哀悼悲傷の情の發展が明らかに感ぜられる。この長大な挽歌に於ては、失はれた貴重な生に對する感動の
流れが停止することなく次から次へと發展し、八十七句にも及ぶ王申の亂の描寫が、却つて赫々たる功績に輝く尊い
皇子の突然の薨去を痛恨する氣持を餘すところなく傳へるところとなつて、全體を統一する契機となつてゐる。かや
うに人麻呂の挽歌に於ては、故人の生前の描寫が現在の哀情と實に見事に交響し、兩者相俟ち相持して迫眞と感動の
世界を形成してゐるのである。

人麻呂が妻の死を泣血哀慟して作つた一連の作は、高市皇子の挽歌とは異り、愛する妻との死別といふ堪へがたい
悲傷痛恨の情が、一段と昂まつた激情となつて奔流してゐる。第一の長歌（二二二〇七）に於ては、最愛の妻が「渡る
日の 暮れ去るが如 照る月の 雲隠る如」「黄葉の 過ぎて去にき」といふ思ひも寄らぬ使者の知らせを受けた人
麻呂は、「言はむ術 爲むすべ知らに 聲のみを 聞きてあり得ねば」と悲痛な叫びを吐露し、「ねもころに 見まく
欲しけど 止まず行かば 人目を多み 數多く行かば 人知りぬべみ 狹根葛 後も逢はむと 大船の 思ひ憑みて
玉かぎる 磐垣淵の 隠りのみ 戀ひつつあるに」と、人目をばかつて戀慕の情を抑へてゐたことに對する痛恨
の情に身もだへしながら、「吾が戀ふる 千重の一重も 慰むる 情もありや」と慟哭してゐるのである。いかに妻
の死を「世の中を 背きし得ねば」（二二二一〇）と諦めようと思つてみても、やはり亡き妻に對する愛惜の情は如何
ともなしがたかつたであらう。第二の長歌（二二二一〇）に於て、「現身と 念ひし時に 取り持ちて 吾が二人見し
趁出の 堤に立てる 榎の木の こちごちの枝の 春の葉の 茂きが如く 念へりし 妹にはあれど 憑めりし 兒

らにはあれど」と、過ぎ去つた現世に於ける妻の姿を回想し、益々激しい悲しみの情に打ちひしがれてゐる。遂には痛恨の情に堪へ切れずして、「吾妹子が止まず出で見し 輕の市に」(二二二〇七) 妻の姿を求めて出で立ち、また「大鳥の 羽貝の山に 吾が戀ふる 妹は坐すと 人の言へば 石根さくみて」(二二二一〇) 難澁しつつ登つて行つてゐる。しかしもとより妻の姿はほのかにも見えす、「玉梓の 道行く人も 一人だに 似るが行かねば」(二二二〇七) 絶望と悲傷の餘り、「すべをなみ 妹が名喚びて」(同上) 悲しみの極致に入るのである。かくて最愛の妻との死別といふ悲傷は、單なる悲しみを超えて悲壯にまでたかめられたのであつた。

四

以上見て來た如く、人麻呂の挽歌にはその根柢に常に現世の生への限りなき愛があつた。この生命への愛が發して悲傷となり、純眞な熱情のほとばしりのままに死を悼む慟哭となつたのである。人麻呂は愛する妻との死別といふ悲壯な體驗をしてゐる。そこにはとり殘された嬰兒があつた。(二二二一〇) その幼兒をいかに扱ふかといふ苦惱もあつたであらう。また彼が敬慕する皇族の薨去に暗膽たる心持になつたこともあるに違ひない。狹岑の島や香具山で見も知らぬ路傍の人の屍に逢ひ、吉野に於ては出雲娘子の溺死を見て、悲哀の情に身をつまされる思ひもしたことであらう。しかしそれらの悲劇が人麻呂に厭世觀を抱かせ、物の見方や生活方法を變化させるやうなことは全然なかつたのである。それは人麻呂が常に現實の生命を愛し、愛するが故にもつ現世の生に對する感動に支へられてゐたからに他ならない。數多い萬葉の挽歌の中で、人麻呂の作品が一際生彩を放つてゐるのもそのためであらう。